



写真-1 JR 福知山線に沿って流れる田松川（平成 27 年 5 月撮影）

■ 河川争奪地形を利用して開削された人工の河川・田松川

写真-1 は、JR 篠山口駅の南南東、約 800m 付近（海拔 195m）を JR 福知山線に沿って南へ超ゆっくりと流れる田松川です。田松川は、二級河川・武庫川の起点からさらに北に伸びる普通河川（法定外河川）ですが、上流部であるにもかかわらず極めて緩い勾配（≒1/1,000）で、よく見ないと流れの方向がわからないくらいです。ちょうどこの付近は、太古の昔、武庫川水系と加古川水系で河川争奪があった地域で、南矢代から篠山口を経て篠山川に抜ける谷底平野の中に分水界があります。いわゆる「谷中分水界（こくちゅうぶんすいかい）」で、篠山口駅東交差点には、その案内板が立てられています。

かつて、篠山盆地を流れる篠山川は、武庫川に流れ込んでいましたが、ある時、武庫川の上流域を成していた篠山川流域が加古川水系に争奪されてしまいます。上流域を奪われた武庫川は、水量が激減して川幅が狭くなり、今では広い谷底平野を細々と流れています。

田松川は、この河川争奪（かせんそうだつ）地形を利用して明治時代初期に開削された人工の河川（運河）で、加古川の左支川・篠山川と武庫川をつないで舟運が開かれましたが、わずか数年で廃業となりました。その後、大正時代末期から昭和の初頭に、味間（あじま）村から古市村にかけて耕地整理（A=180ha）が実施され、これに併せて田松川は用水路になったり埋め立てられたりしましたが、以下の 3 ヶ所で名残りをみることができます。

- ① 八上小学校前～糰ヶ坪（もちがつぼ）付近
- ② 旧丹南町野中（現・丹波篠山市野中）付近
- ③ 旧城南村宇土から旧丹南町役場前に至る一般県道 299 号大沢新東吹（ひがしぶき）線（通称「弁天街道」）沿い

今回は、明治初期に地域の期待を受けて開削された田松川の通船事業について調べてみました。

■ 「加古川水系 vs 武庫川水系」の河川争奪の結果、篠山川は加古川水系へ

加古川水系と武庫川水系の河川争奪は、『武庫川散歩』に掲載されている「武庫川のふしぎな地形と地質」によると、概ね下記のような流れで河川争奪が行われたと推定されています。

① 約3万年前までは、古武庫川は幅広い河谷を砂礫で埋め立てながら、篠山盆地から当野付近の狭窄部を抜けて、丹波山地、三田盆地へと流れ下っていた。

② 約3万年前頃から、当野付近の山地小流域より押し出してきた土砂で古武庫川は堰き止められて、当野付近から篠山盆地にかけて湖や湿地（古篠山湖）が広がった。その後、こうしてできた湖や湿地は、細かい粘土やシルト、泥炭により次第に埋め立てられていった。

一方、約3万年前に篠山盆地西方の山地部を源流としていた加古川の支流（古篠山川）は、その後も山地を掘り込んでいき、篠山盆地を流れる古武庫川との分水界の高度を低下させていった。

③ 約1万年前：堰き止めによる古武庫川上流部の河床高度の上昇もあり、古武庫川の河床高度と古篠山川の分水界との高度差は著しく減少した。そして、約1万年前以前に、おそらくは大洪水に際して、古篠山川は、まず宮田川流域を争奪し、次いで古武庫川の上流域を争奪していった（河川争奪）。

④ 現在：古武庫川の上流部を争奪した古篠山川は、水量が増えて侵食力が著しく増し、それまでの盆地床を掘り下げて両岸に河岸段丘を造り上げていった。

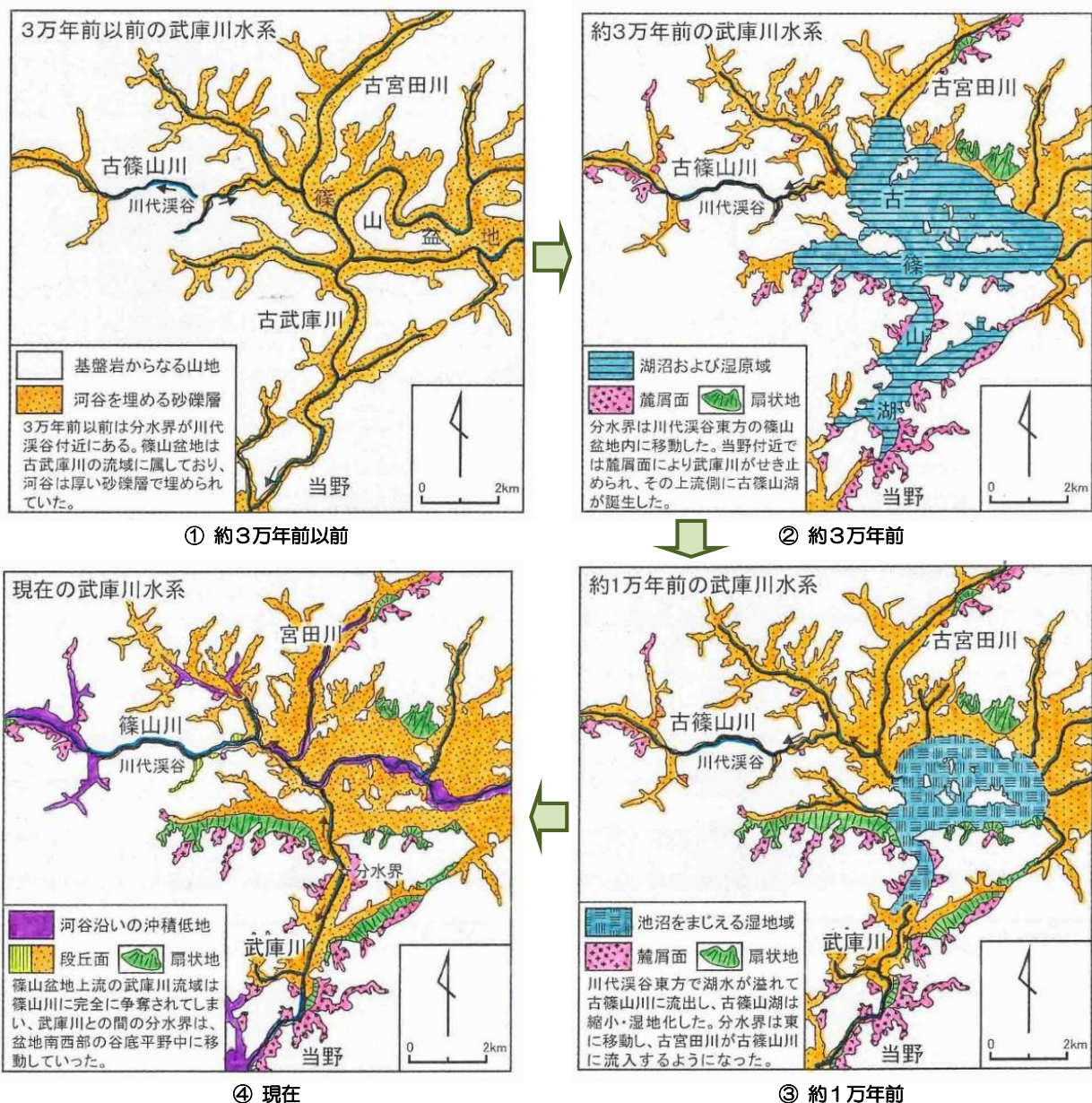


図-1 篠山盆地における加古川の支川・篠山川と武庫川の河川争奪の歴史（『武庫川散歩』から引用・加色）

■ 田松川の谷中分水界はどこ？

一般的に分水界は山稜がその役割を果たしますが、ごく稀に平地にある場合があります。この分水界を「谷中分水界」と呼んでいて、丹波地域には「谷中分水界」が複数存在します。

① 「石生の水分れ (いそうのみわかれ)」

丹波市氷上町石生にある日本一低い谷中中央分水界（標高約 95.45m）です。この分水界に落ちた雨水は 北側に落ちると由良川を通して日本海へ、南側に落ちると加古川を通して瀬戸内海へと流れて行きます。周辺は「水分れ公園」になっていて、園内には博物館もあります。



写真-2 高谷川の「石生の水分れ」



写真-3 栗柄谷中分水界 (栗柄ダム天端から撮影)

② 栗柄谷中分水界

丹波篠山市の栗柄 (くりから) 集落を境とし、つづみ峠に源を発する宮田川 (みやたがわ) と、無名峠 (杉ヶ谷) に源を発する小河川が同じ谷内でわずか 150m 余りの幅をおいて平行に流れ、本来、一筋の流れに収斂されるはずの河川が突然方向を分かち、前者は加古川水系として南の瀬戸内海に下り、後者は西に流路を変え、栗柄峠を下り由良川水系として日本海に流れ下っています。

③ 田松川の谷中分水界はどこ？

では、加古川水系と武庫川水系の河川争奪の結果、分水界は田松川のどの辺に落ち着いたのでしょうか。

『武庫川散歩』に掲載されている「武庫川の流れにズームイン」の中で、小林文夫先生が武庫川と篠山川の境目を探してうろついている記事がありますが、ほとんど流れていないので分水界の位置を特定するのが難しいようです。

ただ、JR 篠山口駅の東口駅前広場近くに「谷中分水界」の案内板が建っていて、そこに書かれた地図に谷中分水界の位置が明示されています。筆者は、その地図を見て数百 m 歩いて現地に行きましたが、何の表示もなく「このあたりか。ふーん。」で終わってしまいました。



写真-4 田松川の分水界と思しき場所

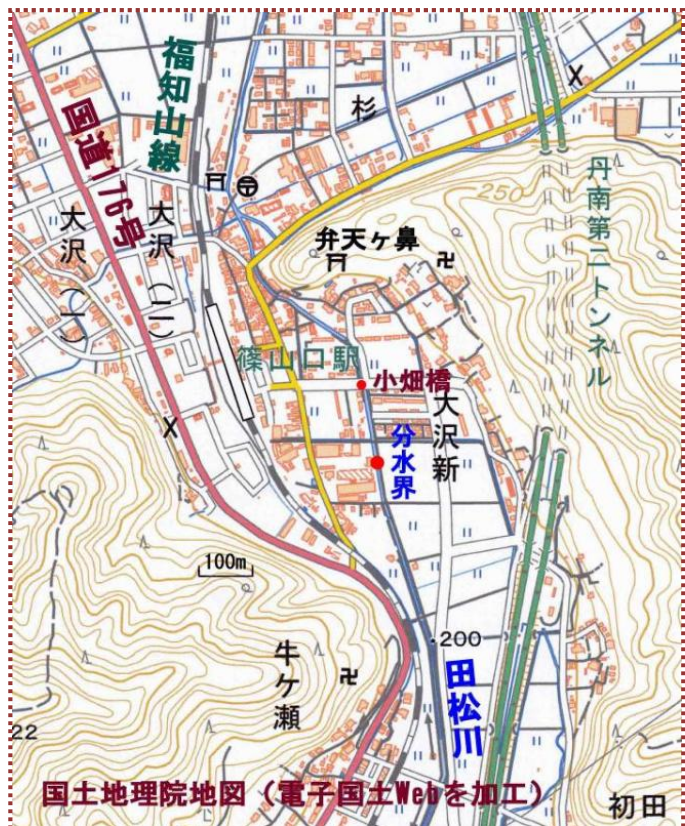


図-2 田松川の分水界の位置

明治時代になって物流が活発化していく中、旧多紀郡（現・丹波篠山市域）においても郡内で生産された農産物を阪神地域に送るとともに、阪神地域で生産された物資を丹波地域に送ろうとする動きが出てきます。しかし、郡境は全て峠道で道は悪く曲がりくねっていたことから、陸路ではなく、河川争奪地形を活かして舟運を開くことに。

一方、この情報をつかんだ篠山二階町の豪商・平野恭蔵は、同年 10 月 24 日「篠山川上より水源を發して、下弁天鼻まで水道を開いて泥川に注ぎ、草野村まで泥川を修繕し、篠山～三田を結ぶ通船事業を興したい」と豊岡県※3 篠山支庁に建言します。豊岡県では早速これを採用して、県参事・田中光儀と篠山支庁詰めの松島潜が現地調査を行い計画を作成しました。ということは、田中俊兒は兵庫県に建白しただけで、構想の具体化には関わっていないということか。

※2 泥川：現在の武庫川上流部、丹波篠山市当野付近から弁天ヶ鼻付近を流れていた川の呼称。

※3 豊岡県：明治4（1871）年7月14日、廃藩置県により豊岡藩が豊岡県となる。同年11月2日、第1次府県統合により但馬国生野県・出石県・豊岡県・村岡県・丹後国久美浜県・宮津県・舞鶴県・峰山県・丹波国篠山県・福知山県・柏原県が統合され、改めて豊岡県が発足。明治9（1876）年8月21日、第2次府県統合により、豊岡県は分割され、但馬国と丹波国氷上郡・多紀郡は兵庫県に、丹後国と丹波国天田郡は京都府に編入された。



■ 篠山～三田間の通船事業概要と分水界付近の舟運ルート

篠山～三田間に舟路 10 里（≒39km）を開設する費用の負担は、官が 7,500 円、民間が 5,000 円（篠山=3,000 円、三田=2,000 円負担）で、改修される河川の延長は 28km、川幅は 4 間（≒7.3m）（水面幅 2 間≒3.6m）となっています。

① 向井～八上上（やがみかみ）：舟運の上流端の向井（現・丹波篠山市向井）から八上上村（現・丹波篠山市八上上）までは篠山川の流れを利用する。



写真-6 泉橋から下流を望む



写真-7 北嶋橋から下流を望む



写真-8 北嶋橋から上流を望む

② 八上上～弁天ヶ鼻：八上上村の字門田井堰（丹波篠山市に聞くと現在、門田井堰という字名も、門田井堰という堰もない。）から大沢村字弁天ヶ鼻までは新たに舟路を開削。延長 5504 間（≒10km）、幅は堤を含め 4 間（≒7.3m）、深さ 4 尺（≒1.2m）、堤防は杭柵 1 段としています。八上上村の北方から篠山川の水を舟路に引き入れ舟運のための水深を確保する。



写真-9 通称弁天街道沿い



写真-10 八上小学校前



写真-11 八上小学校の東

③ 弁天ヶ鼻～古森：弁天ヶ鼻から草野村郡境（古森）までは、距離 2 里 8 町（≒8.7km）、川幅平均 3 間（5.4m）、泥川を改修して舟運に利用した。



写真-12 田松川と真南条川の合流点



写真-13 谷中分水界の南 700m から南矢代駅方向を望む

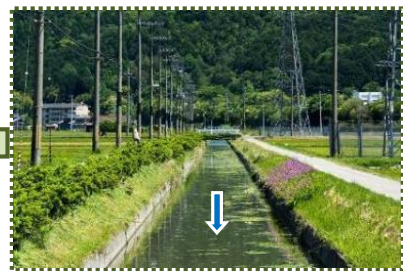


写真-14 谷中分水界の南 700m から篠山口駅方向を望む

④ 古森～三田：武庫川を利用する。



写真-15 武庫川・日出坂洗堰の上流部



写真-16 JR 福知山線・草野駅付近の武庫川



写真-17 古森（古森浄化センター付近）

舟路開設に関係する八上上村から草野村までの 21 ヶ村の承諾を得て、明治 6 (1873) 年 12 月工事が開始されました。工事は、田中光儀と松島潜の指揮の下急ピッチで進められ、明治 7 (1874) 年 2 月 21 日開通の祝賀会が篠山と三田で催されました。『丹南町史』や『篠山町百年史』にはこのように記されていますが、既存の河川を利用する区間はあるものの、舟路新設が約 10km もあり、それをわずか 3 ヶ月で完成させるというのはとても信じられません。

ただ、篠山口駅東交差点にある「谷中分水界」の案内板には明治 8 (1875) 年舟路完成と記されています。この点について丹波篠山市教育委員会の方に調べていただきましたが、わかりませんでした。いずれにしても、武庫川と加古川の両水系が運河によって結ばれ、一本の河川の中に分水界が存在するという、全国的にも珍しい河川が誕生したのです。

舟運に使用された舟の大きさは、長さ 13m、幅 2m くらいで、向井村浜に 3 艘、泉村に 3 艘、糯ヶ坪に 5 艘、弁天ヶ鼻に 6 艘、古森村に 3 艘、計 20 艘が配置されました。船積みは 12 駄で、舟路の両側は 2m の道を確認し、船曳きに便利ようにしています。八上上村、八上内村、野中村、杉村には水門を設置して水門守(管理人)を置き、水の増減を行ったり出水時は門扉を閉鎖するなどの管理を行っていました。夏は、灌漑用水として利用されることから、通船は秋の彼岸から春の彼岸までとし、それ以外は休航となります。

この運河は、舟路開設に携わった二人(田中光儀、松島潜)の頭文字を取って「田松川」と命名されました。通船会社が設立され、通船規則と運賃が定められました。そして、十五石舟が武庫川を下って三田まで往来し、米・薪炭・茶・マツタケなどが三田を経て、阪神間に流通することとなりました。

■ 通船事業、わずか 4 年余りで破綻

通船事業は壮大なプロジェクトでしたが、水量が乏しい上、堤防の破損が甚だしく、道路整備による需要の減退、舟の修理など経費がかさみ、欠損の累積により明治 10 (1877) 年には休航のやむなきに至りました。その後、小西弥兵衛なる者が下請してやりましたが失敗に終わり、明治 11 (1878) 年ついに通船会社は解散しました。借入金の返還にも困り、明治 16 (1883) 年には兵庫県令・森岡昌純に借金棒引きの嘆願に及んだとか。

■ モノローグ

武庫川の上流部が、かつて「泥川」と呼ばれていたのを初めて知りました。古武庫川が堰き止められてできた湖や湿地に、細かい粘土やシルト、泥炭が堆積したとされていますが、そのためか今でも河床は軟弱だそうです。これが「泥川」と呼ばれた所以なのでしょう。



写真-18 紫陽花



写真-19 紫陽花



写真-20 紫陽花

【参考資料】

- 1 『丹南町史・下巻』 丹南町 平成 6 年 3 月
- 2 『篠山町百年史』 篠山町 昭和 58 年 5 月
- 3 『北摂・三田の史話』 児玉尊臣 昭和 49 年 10 月発行
- 4 『武庫川散歩』 江崎保男編 人と自然の博物館刊 平成 18 年 3 月
- 5 『丹波ぶらり散歩道～ふるさと探訪～田松川 活性願い明治に開通』 丹波篠山市 HP 令和 2 年 6 月
- 6 『ディスカバーあじま・あじまゆかりの地を求めて』 あじま地区まちづくり協議会 HP
<https://www.eonet.ne.jp/~ajimamachikyo/discoverajima.html>
- 7 『豊岡県』 フリー百科事典『ウィキペディア (Wikipedia)』

※ 田松川沿いにはたくさんの紫陽花が植えられていて、梅雨頃には青、白、ピンクなど色とりどりの花が楽しめます。

※発行：平成 27 (2015) 年 8 月 『ひょうご水百景』 No.51

改訂：令和 8 (2026) 年 3 月 『ひょうご水百景』 No.51